

一見(鎧屋) 真理子
(Ichimi(Abumiya) Mariko)



国立教育政策研究所
国際研究・協力部
総括研究官

1958年東京生まれ。国立教育政策研究所 国際研究・協力部 総括研究官。

大学・大学院では、中国語・比較教育学・教育史を専攻。中国における子育て、子ども観、幼児教育・児童研究に関心をもち1年半の北京留学。帰国後、国立教育研究所(現国立教育政策研究所)を拠点として日中教育関係史、アジア地域の教育政策と教育改革、学校と地域社会との連携、東アジアにおける子育て支援と早期教育、学校にもとめられる生涯にわたる資質能力形成等をテーマとする調査研究に参加。そのかわり、職務としてユネスコアジア・太平洋地域教育協力事業の運営、ボランティアとして日中教育研究交流会議等の運営や日中戦争の被害にあった山間僻地への教育支援活動などにも従事。いずれにしても、教育をとおしての持続可能な社会の実現やホリスティックなアプローチに関心がある。

主要業績:『親の学校参加に関する国際比較研究・報告書』(編著)、『近代日本のアジア教育認識(資料篇・中国の部)全22巻』(共編)、『東アジアにおける早期教育の現状と課題・報告書』(編著)、『幼児の生活アンケート報告書:東アジア5都市調査』(共著)、『世界の幼児教育・保育改革と学力』(共編著・近刊)、『世界のオルタナティブ教育』(共著・近刊)など。

幼児教育における日中関係史・比較史のスケッチ —うかびあがる諸問題—

中国と日本の近代幼児教育の交わりは、100年以上の歴史を有している。中国文明の長く大きな影響の下で自己形成し、近代国家となった日本が、20世紀の初頭に、中国側にはじめて影響力をもち、またその30年後には植民地進出と戦争によって深い傷跡を残すことになった。その反省にたつ平和友好関係の樹立からもすでに今年で30年が経過する。

「80後」といわれる一人っ子第1世代の誕生のころから、中国の幼児教育現場や子どもの育ち方・教育の在り方を見つめてきた者として、100年の関わりの中の興味深いトピックに光をあてて、両国の子ども学の流れへの話題提供としてみたい。

はじめに

(1)「中国幼児教育百年」の起点への関わり

フレール保育の導入約30年の時差と人的交流

(2)倉橋惣三と陳鶴琴—日中の新教育それぞれの展開

カリキュラム観・遊び観そして後世への影響

(3)革命と日中戦争が中国保育史に残した影響

戦争の狭間で誕生した寄宿制保育

(4)日中幼児教育界の交流

学会・研究者・実践家・留学生・企業

(5)共同研究の中で見えつつある問題

日中間の相違点、学びあうべき諸点、協力関係のあり方

むすび